宮川健郎　私の出会った児童文学者たち　第 13 回
第４章　宮川ひろ
その３　『「へてか へねかめ」おふろでね』（前半）

これまでの三つの章では、坪田譲治先生、前川康男先生、今西祐行先生、あまんきみこさんのことを書いた。この先生がたと母宮川ひろのかかわりを軸に書いたから、もう、すでに、母のデビュー作『るすばん先生』（ポプラ社 1969 年）のころまでを述べている。

第４章では、宮川ひろ（1923～2018 年）のデビュー以降のさまざまを作品に即して振り返る。母もまた、私の出会った児童文学者にほかならなかった。

旅立ちまで

2018（平成 30）年 12 月 29 日、母宮川ひろが亡くなった。

2016 年の秋口あたりから、母は、だんだん足腰が立たなくなって、2017 年の２月にはベッドから起き上がれない朝があった。救急車で整形外科の病院に搬送して応急処置をしてもらったが、そのときに、母自身がどこかいい施設をさがしてほしいと言い出した。妻とふたりで、自宅から 30 分かもう少しで行かれるあたりの５、６か所を見学して、食事も試食させてもらった。入所する候補を二つにしぼりこんだところで、母も見学して試食もして決めたのが、東京都府中市の大國魂神社の裏手の閑静な地区にある介護付き有料老人ホームだった。３月末日に入所した。

その老人ホームでいろいろなお世話をいただいて、静かにすごしていたのだが、2018 年 10 月 31 日の夜、自室で転倒して、左大腿部を複雑骨折した。かなり重症だったが、府中市内の病院で何とか手術をしてもらった。

３週間ほどで老人ホームにもどれたが、実は、骨折する少し前ごろから、食事や水分が取りにくい状況があった。退院後、もっとはっきりそうなってきたから、点滴などで水分をおぎなうために、12 月 12 日に今度は青梅市内の病院の内科に入院した。２週間あまりのちに、この青梅の病院で亡くなった。95 歳だった。

亡くなった日は、午後に、現在、母の実家をまもってくれている、私の年上のいとこたちなど、ふるさとの群馬から３人お見舞いに来てくれて、少し話をしたり、妻がみかんの房をむいて、母の口もとで果汁をしぼって飲ませたら、「おいしい」といったりした。

そんなふうに最後まで意識もあったのだが、見舞客が帰った夕方から、ぐあいが悪くなり、22 時 15 分に亡くなった。お医者さんは、「老衰」とおっしゃった。

亡くなる前の３時間ほどは、息が荒くなって、少し苦しそうだったけれど、それでも、おだやかに旅立った。最後の最後は、あっという間に向こうに行ってしまった。

「先生は、戦争がすき？」

2017 年の春、老人ホームに入所したばかりのころ、日当たりのよい部屋で、母がまた、貞兄（ていにい）のことを語りはじめた。貞兄というのは、井上貞治、母のすぐ上の４歳年上の兄で、太平洋戦争中に、南方の戦線で遺骨も帰らないような戦死をした。母は、入って間もない、この施設を自分の終のすみかと考えたのだろうか、「貞兄は、飢えて死んだんだろうねえ。」といって、少し泣いたりした。

貞兄とすごした幼年時代のことは、『しあわせ色の小さなステージ』（ポプラ社 1988 年、伊勢英子絵）にずーっと描かれている。

『夜のかげぼうし』（講談社 1978 年、箕田源二郎絵）で静岡に疎開学童を引率する若い女教師、八木先生は、母の自画像とも考えられるが、1945（昭和 20）年の２月末のころ、疎開先の寺に茶色の封筒が届く（「茶色のふうとう」の章）。手紙を読んだ先生は、子どもたちにかくれて、職員室のすみにうずくまって泣きじゃくる。泣いている先生に気がついた、４年生の信年が炊事のおばさんに話すと、おばさんは、そっと職員室に入っていく。

しばらくすると、おばさんだけ出てきました。おばさんまで、手ぬぐいで目のあたりをふきながら出てきました。

「どうしたの？」

待っていて、おばさんをとりまきました。おばさんは、すぐには返事もできないようです。本堂のすみまで歩いていってから、声をおとして話してくれました。

「おにいさんの戦死を知らせてきた手紙だったんじゃと。……やさしいおにいさんでの、なかのいいごきょうだいじゃったんだろう……。」

おばさんは、それだけいうと、すいじ場へもどって、夕食のしたくにかかりました。

これより前に、疎開している子どものおとうさんが戦死した知らせも届いていた。

３月の最初の日曜日、八木先生は、子どもたちを摘み草に連れ出して、そのときに、子どものころ、おにいさんが教えてくれた、かげろうの話をする。

「（前略）『ことしこそ、いいお米を作ってやるぞって、土の心がもえているのが、かげろうなんだ。』っておしえてくれたのよ。」

先生は、遠くのほうへ目をやって話しました。

そのおにいさんが、このあいだ戦死したというおにいさんなのでしょう。

信年は、「先生は、戦争がすき？」と、信年たちがお堂のぼうさまからだずねられたことばを口にする。「え？」とおどろいて信年の顔を見た八木先生は、すきともきらいとも答えない。でも、「ばかなことをいうのではありません。」としかりはしなかった。

「兄のこと」

貞兄のかげろうの話は、母にとっては、たいへん重要なモチーフの一つである。教育出版の 1977 年度版・小学校国語教科書５年生の物語教材「かげろう」や、国土社から刊行された『現代の民話・戦争ってなあに』のシリーズの１冊『つばき地ぞう』（1984 年、石倉欣二絵）のうちの表題作に書かれている。永田治子さんの絵で刊行された絵本『文字のない絵本』（ポプラ社 2003 年）にも描かれているが、ここでは、エッセイ「兄のこと」（『日本児童文学』1969 年 9 月）から、あらためて紹介する。

雪が消えたばかりの麦畑に、小学２年生だった「わたし」と６年生の兄が、ふた

りだけで麦ふみに行く。仕事の中休みに兄が「きょうはいいもん見してやるでなあ」という。「いいもんて、なに？　どこに持ってるん」とたずねる妹に、兄は、「いいもんは遠くにあるだ。めっけてみろ」というのだ（引用は宮川ひろ『母からゆずられた前かけ』文溪堂 1993 年による。以下も同じ）。

「なにも見えねえ、目がちらちらするだけだ」
　わたしがあきらめたようにいうと、
「うん、そのちらちらするものだ。土の上に燃えてるようなものが見えるべえ」
　わたしはもう一度からだを横にして、じっと見つめてみました。
「ほんとだ、ちかちかと燃えてるみたいだ」
「な、見えたっぺ、あぁれをなあ、かげろうっていうだよ」
「かげろう？」
　わたしはこのときはじめて、かげろうということばを聞きました。

「かげろうってどうして燃えるん？」――幼かった「わたし」は、聞かずにはいられない。兄は、しばらくとまどっていたが、こういう。

「それはなあ、おいらだってさあ、春になると、なにかしてみてえなあって、ほれ心がおどるでねえか。それと同じだ。土にだってやりてえことがあるだ。今年こそいい麦を育ててやるべえさあって、土の心が燃えているだよ。それがかげろうだ。その燃えることをな、希望っていうだ――」

昭和の初年代、山深い村の兄妹の会話だ。たずねられて、苦しまぎれにいったのだと思うが、小さな妹に「希望」を語った少年は、23 歳で戦死した。（注）私の一度も会ったことのない伯父である。

最期のとき、母は、私たちの手をはなして、何だかするっと向こうに行ってしまったけれど、長く長く会えなかった貞兄のところに行ったのかなと思った。長く長く会えなかった時間は、日本の戦後という時間そのものだ。そして、向こうの国には、母の死より 38 年前に亡くなった父もいるはずだ。

「へてか　へねかめ」

母が老人ホームに入所する前、整形外科の診断は「頚髄症」だった。老化のために、背骨のなかの神経の通り道が細くなっていた。老人ホームに入ったころは、半分は歩けていたのだけれど、やがて、完全に車いすになった。だんだん手も不自由になりはじめ、それは、痛みをともなった。2018 年の春以降は、何度も薬の処方や介護のメニューを見直した。ただ、薬がうまく効いたのか、心身がさっぱりしている感じの時期があった。6 月のはじめに、母のところに行ったら、原稿を一つ書いたという。しかし、幼児絵本のテキストだったから、絵描きさんや編集者とやりとりしなければ本にならない。それができるの？とたずねると、できない、おまえがやって、という。正直、こまったなと思いながら、原稿をもって帰った。

タイトルは、「へてか へねかめ ３かいね」。母がよく使っていたコクヨのＢ５、緑色の罫の原稿用紙だ。痛い手でゆっくり書いたのだろう、罫からはみ出す大きめの字で横書きになっている。場面割されていて、原稿用紙 1 枚が 1 場面、全部で 12

場面ある。学齢前くらいの男の子とおじいちゃんのつきあいを描いた作品で、「へてか へねかめ」は、ふたりが唱える唱えことばの言いはじめだ。おもしろい。しかたがない、何とかしようと考えた。

そのつぎに母の部屋に行ったとき、原稿のことは引きうけるといった。そして、今回は、私を「編集協力」にしてほしいともいった。前回も書いたが、私は、小学校の高学年のころから、母の原稿を読んで意見をいってきた。けれど、「編集協力」を名のるのははじめてで、絵本の制作過程でのテキストの改変などにも責任をもつことにした。

童心社会長の酒井京子さんにお願いして、原稿を見ていただいた。7月はじめに原稿をお送りしてすぐに、酒井さんから私の携帯電話にショートメールが届いた。――「宮川さん、原稿読みました。とても良いと思います。」童心社が刊行してくれることになったと伝えると、母は、「酒井さんはきびしいからなー」といって笑った。酒井さんは、かつて、画家の林明子さんといっしょに、四年半ほどもかけて、絵本『びゅんびゅんごまがまわったら』(童心社 1982年)をつくってくださった編集者だ。母は、そのときの苦労と喜びを思い出したにちがいない。

実際の編集は、童心社編集部の永牟田律子さんが担当してくださることになった。絵は、母の『天使のいる教室』(童心社 1996年)三部作の挿絵のましませつこさんだ。母は、絵本の刊行を楽しみにしながら亡くなった。(つづく)

(注)

エッセイ「兄のこと」は、「二十三歳からすこしも老いることのない兄です。」とむすばれている。宮川健郎編「宮川ひろ年譜」(未発表)には、1944(昭和19)年9月、「兄貞治、ニューブリテン島で戦死との公報とどく。」とある。また、1946(昭和21)年9月には、「戦死した兄貞治の遺骨として、ひとさじの砂が入った白木の箱とどく。葬儀を行う。」とある。

「宮川ひろ年譜」は、私が母にインタビューをして編んだものである(1989年2月28日付)。「宮川ひろ年譜・補遺」(1994年4月23日付。1999年12月24日付で増補)もある。白木の箱には、貞治の遺骨として石一つが入っていたと証言する親類もいる。

貞治が戦死した1944(昭和19)年、ひろは21歳だから、4歳年上の貞治は25歳だったか。

「年譜」には、1941(昭和16)7月、「兄貞治出征。宇都宮の師団に入営。」と記している。この年、ひろは18歳だから、貞治は22歳か。貞治の誕生日が不明で特定できない。

母が亡くなった翌年の夏、母の実家をたずねて、実家近くの墓にも行った。墓碑銘には、「昭和十九年五月二十五日 井上貞治戦死 二十七才」ときざまれていた。「年譜」の昭和19年9月というのは、貞治の戦死した月ではなく、戦死の公報がとどいた月ということになるだろうか。また、墓碑銘の27歳は、数え年だと思われる。

(付記) 宮川健郎「宮川ひろという人」(『月刊子どもの本棚』2019年6月)と内容が重複するところがあることをおことわりします。